

ことも選択肢ではなかったかと思う。自然科学の一般書を平易な表現で書くことは本当に難しいと感じる。ところが、初版から6ヶ月後の2003年10月に第2刷が発行されたのである。結構読まれていることの証拠であり、評者の思いが杞憂であったことに安堵した次第である。

参考文献

- 諏訪兼位, (1997)「裂ける大地—アフリカ大地溝帯の謎」, 講談社選書メチエ 107, 256p.
 星野光雄, (1997) 諏訪兼位著「裂ける大地—アフリカ大地溝帯の謎」, アフリカ研究, 51, 83-85.

フィリップ・ゴレイヴィッチ著

(柳下毅一郎訳)

『ジェノサイドの丘——ルワンダ虐殺の隠された真実』

WAVE 出版, 2003 年,

上巻 218 頁, 下巻 251 頁, 各 1,600 円

武内進一 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

ルワンダの内戦と虐殺について書かれた出版物のなかで、本書は最も多くの読者を得たものの一つである。「ザ・ニューヨーカー」のスタッフ・ライターの手による本書は、その刺激的な原題¹⁾と相まって多くの読者を獲得し、全米書評家協会賞に輝くなど、出版業界から広範な関心を呼んだ。本書はジャーナリストの手によるルポルタージュだが、記述の水準は高い。脚注や引用文献こそ挙げられていないものの、筆者はルワンダに関する主要な研究書に目を通し、さらに1995年から98年の間に合計9ヶ月間ルワンダやコンゴ民主共和国²⁾に滞在して、政府要人や一般人への多数のインタビューを実施している。このように、かなりの時間と労力を割いて書かれた本書は、大量虐殺という異常事態下において人々が——そして国際社会が——いかに行動したのか、迫力を持って描き出している。こうした出版物が邦訳されることは意義深く、訳者と出版社の努力に敬意を表したい。

ルポルタージュの役割は、激動する現実を自分の枠組みで切り取り、そこで生じている問題を一般読者にわかりやすく伝えることだろう。そこには研究書と異なる役割が求められる。その意味で本書は十分成功しているし、評者が本書について論じることは畑違いかも知れない。この点を踏まえた上で、以下では主として、本書を読んだ際に評者が感じた疑問点を中心に論じたい。それは評

者がルワンダ研究に従事する者として感じた疑問であり、本書の価値を減ずるものというより、本書を読むための注意点と考えてもらえばよい。本書が日本で広く読まれるべき価値を有することに、評者は何ら疑念を抱いていない。

本書を貫く筆者の問題意識は、ジェノサイドにある。なぜ、いかにしてジェノサイドが起こったのか。そこで人々はいかに行動したのか。国際社会はそれにどう対応したのか。それがいかなる政治的帰結をもたらしたのか。本書を通じ、筆者は一貫してこうした問いを重ねていく。ジェノサイドにこだわる筆者の姿勢は、彼の両親と祖父母が「ナチスの手を逃れて米国へやってきた難民」(上巻 p.85。以下引用はすべて訳書による)だったことと関係するのも知れない。ただ、その点をあまり強調すべきではないだろう。ジェノサイドは普遍的な問題である。奇跡的に殺戮を逃れたオデットや、きわめて困難な状況下で避難民を助けるべく奔走したポールといった、極限状況を経験したごく普通の人々に対する筆者の共感と敬意、そして国連やアメリカなど国際社会の無策と誤謬に対する激烈な批判は、いずれもこの問題意識に発しており、ジェノサイドの普遍性と重要性を読者に伝えることに成功している。

筆者の問題意識の重要性とその筆力を評者は高く評価するが、その一方でルワンダのジェノサイドに関する彼の理解には若干疑問を感じた。第一の疑問は、誰が殺されたのかという点に関わる。虐殺の際に、トゥチ(Tutsi)のみならず、フトゥ(Hutu)の反政府勢力要人が殺戮の対象となったことはよく知られている³⁾。トゥチについては完全な抹殺が狙われたが、反政府勢力と見なされたフトゥ要人に対しても殺戮の手が伸びた。ルワンダの虐殺は、主として都市部で実行された反政府勢力要人の暗殺と、主に農村部で遂行されたトゥチ一般人の殺戮とに大別できるが、前者の犠牲者にはトゥチよりもフトゥの方が多かったといわれる⁴⁾。しかし、本書においては、この問題がほとんど考察されていない。

もちろん筆者も、フトゥ反政府勢力が殺害されたことには言及する。しかし、その事実が持つ意味について本書のなかで検討されることはない。トゥチの犠牲者の方がずっと多いことは事実であろうが、フトゥもまた殺戮されたという事実はルワンダの虐殺を考える上で重要な論点を提起する。それによって、「ジェノサイド」概念を捉え直すことができるからである。1948年に国連総会で採択された、いわゆるジェノサイド条約の概念規定によれば、それは「国民的、民族的、人種的または宗教的な集団の全部または一部を集団それ自体として破壊する

意図をもって行われる・・・(中略)・・・行為」(第2条)とされている。この定義に対しては、集団の民族的、人種的な特質が強調される一方で、その政治的特質が無視されているという周知の批判がある(クーパー, 1986)。ジェノサイドの対象として「政治的集団」を加えることは、ソ連などの反対のために断念された経緯があるからだ。

1994年のルワンダにおいては、トゥッチもフトゥ反政府勢力も同じ論理で殺戮された。いずれも、政権中枢の急進派から、彼らが内戦を戦うルワンダ愛国戦線(RPF)のシンパ、「共犯者」だと疑われて殺されたのである。同一の論理で遂行された大量殺戮の犠牲者のうち、一部分だけをエスニック集団が異なるとの理由で考察の対象から除外することは有害無益である。こうした観点から本書を読むと、フトゥ全体をジェノサイドの加害者と捉えるような記述がしばしば気にかかる。それは例えば次のようなものだ。

「民兵たちの手本にならない、フツ族は老いも若きも仕事にとりかかった。隣人が隣人を自宅で切り刻み、同僚が同僚を職場で切り刻んだ。医師が患者を殺し、教師が生徒たちを殺した。」(上巻p.142)

この記述に見られるように、本書ではしばしば、フトゥの一般住民が大挙して殺戮に参加したと強調される。ここに評者が感じる第二の疑問がある。フトゥ一般住民の殺戮への参加を強調する記述は、ルワンダのジェノサイドに関する筆者の理解と深く結びついている。筆者は、それをドイツにおけるユダヤ人虐殺と同様に、全体主義政権の所産と見る。そして、ドイツのような産業の発展がなかったルワンダでは、国民を大挙して動員することで大量殺戮を成し遂げたと主張する。「フツ至上主義リーダーたち」が管理社会のなかで「フツ族全員」に動員をかけ、彼らが「フツ族全員」の殺戮を試みた、という理解である⁵⁾。

ルワンダの虐殺が混乱と無秩序の所産ではなく、政治的意志の貫徹によるものだという指摘は鋭い。だが評者は、ルワンダのジェノサイドを全体主義の所産と捉える理解にはかなり無理があると思う。ルワンダがアフリカの水準では統治能力が高い国であり、国家による社会の管理が比較的強いことはおそらく事実だが、それをナチス・ドイツやスターリン期のソ連のような全体主義国家と同列に論じることは困難である⁶⁾。加えて、殺戮技術の水準の低さを大衆動員によって補ったという議論にも疑問がある。文書資料が豊富で、殺戮の実態が比較的解明されているブタレについていえば、犠牲者のかかなりの部分は教会や学校など公共の場所に逃げ込んだところを軍や憲兵隊に襲撃されて命を落としている(武内, 2003)。

確かに、民兵や一般人もこうした襲撃に参加していたと考えられるが、犠牲者の過半は軍や憲兵隊が所有する銃や手榴弾といった近代的な武器によって殺戮された。近代兵器を用いたからこそ、短期間にあれほどの殺戮が可能だったのである。事実関係を仔細に検討すると、ルワンダの虐殺に関して一般的な「隣人による隣人の殺戮」という理解は、修正が必要だと考える。

もう一つ指摘しておかなければならない本書の難点は、政治現象を分析するためのリソースが不十分で、批判的分析に欠けることである。これは特に、下巻においてキベホキャンプの虐殺事件や、コンゴに対するルワンダの軍事介入を扱う際に顕著である⁷⁾。ここでは、筆者の立論は多くの場合、内戦に打ち勝って新政権を樹立した、カガメ(現大統領)らルワンダ愛国戦線(RPF)側指導者へのインタビューに依拠している。

筆者は、ジェノサイドのような極端な犯罪の後における統治を評価する際には、人権という尺度でのみ考えるのではなく、政治的配慮が不可欠だと主張し⁸⁾、この観点からキベホの虐殺やコンゴ内戦時のルワンダ難民に対するRPFの行為を擁護する。そうした見解はあり得るだろう。だが、この相当に異論が予想される見解を提示するに当たって、筆者が読者に示す材料はRPF側のインタビューがほとんどなのである。これでは、本書の主張にRPF寄りのバイアスがあるとの批判が出るのも当然であろう⁹⁾。インタビューを中心に構成するという本書の手法は、虐殺下における一般人の行動を活写する前半では有効に作用するのだが、国際政治に関わる後半になるとマイナスの効果を生んでいる。

本書の内容に関するコメントは概ね以上だが、最後に翻訳について一言述べておきたい。翻訳が大変な作業であることは十分承知しているが、本書の翻訳には若干失望した。訳文は読みやすいのだが、翻訳のミスが散見される。また、フランス語の日本語発音表記や、人名の読み方などに不正確な点がある他、ワープロの変換ミスと思われる誤記もある¹⁰⁾。訳者はアフリカの専門家ではないようだが、何らかのフォローできなかったのだろうか。

以上、幾つか注文を付けたが、これも評者が本書を熟読に値すると思ったがゆえである。本書の翻訳は大変に意義深いということも、最後にもう一度指摘しておきたい。

参考文献

- クーパー, レオ(高尾利数訳), (1986)『ジェノサイド—20世紀におけるその現実』, 法政大学出版局。
 リンス, ホアン, (1995)『全体主義体制と権威主義体制』, 法律文化社。

Newbury, David, (1998) "Understanding Genocide", *African Studies Review*, Vol. 41, No.1, pp.73-97.

Pottier, Johan, (2002) *Re-Imaging Rwanda: Conflict, Survival and Disinformation in the Late Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge University Press.

武内進一, (2003) 「ブタレの虐殺—ルワンダのジェノサイドと「普通の人々」」, 武内編『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって』, アジア経済研究所, pp.301-336.

武内進一, (2003) 「書評 Pottier, Johan. *Re-Imaging Rwanda: Conflict, Survival and Disinformation in the Late Twentieth Century*」『アジア経済』, 第44巻第9号, pp.72-77.

脚注

- 1) 原題 ("We wish to inform you that tomorrow we will be killed with our families") は、ルワンダ西部のキブエ州ムゴネロの教会で殺害されたトゥッチの牧師たちが、教区議長に宛てて虐殺を止めるよう懇願した手紙の文言である。
- 2) 1997年5月まではザイルだが、以下本稿ではコンゴで統一する。
- 3) トゥッチはルワンダの人口の1割強を占め、フトゥは8割強を占める。その他、先住民であるトゥワ(Twa)が人口の1%程度を占める。トゥッチ、フトゥ、トゥワともに同一言語を話し、同じ土地に混住する。とりわけトゥッチとフトゥについては、通婚関係も頻繁で、今日では集団として生業の差異は観察されない。なお、筆者は以前、日本語表記の際に「ツチ」、「フツ」と記していたが、現地語の発音により近いことを考慮して、最近「トゥッチ」、「フトゥ」と記している。本稿でも引用部分を除きそのように記す。
- 4) 例えばNewbury [1998]参照。
- 5) 「1994年のルワンダを、外の世界は崩壊国家がひきおこす混乱と無政府状態の典型だと見なしていた。事實は、ジェノサイドは秩序と独裁、数十年におよぶ現代的な政治の理論化と教化、そして歴史的にも稀なほど厳密な管理社会の産物だったのだ」(上巻p.117)
「ホロコーストによる殺人の産業化が人類の進歩という概念自体に疑問を投げかけた。それが過去五十年間の常識である。・・・中略・・・テクノロジーの進歩なかりせばドイツ人もあれほどたくさんユダヤ人は殺せなかった、と議論は続く。だがあくまでも殺したのはドイツ人であり、機械そのものではない。ルワンダのフツ至上主義リーダーたちはこれを完璧に理解していた。マチュエテを振る人々を振りまわせるのなら、技術的な遅れはジェノサイドの障害にはならない。・・・中略・・・フツ族全員がツチ族全員を殺さなければならぬ。」(上巻p.117-118)
- 6) 全体主義体制については、リンス[1995]の議論を参照。
- 7) ギンゴロ州のキベホには国内避難民のキャンプがあった。そのなかには旧ハビヤリマナ政権の支持者や民兵がおり、彼らの煽動と脅迫のために、内戦終結後も避難民の帰還が一向に進まなかった。1995年4月、新政権は軍を使って強制的に避難民キャンプを解体したが、その際混乱のなかで多数の避難民が殺害された。コンゴの避難民キャンプにおいても、キベホキャンプと同様、旧政権派武装勢力のために帰還が進まず、彼らは国際社会の援助を得つつルワンダへの攻撃を繰り返していた。ルワンダは、1996年後半にコンゴ東部で起こったル

ワンダ系住民の武装蜂起を支援して避難民キャンプを攻撃させ、そのままコンゴに軍事介入して、翌年にはモブツ政権の打倒に至った。この際、コンゴにいたルワンダ難民の多くは本国に帰還したが、本国に戻らず西方に逃亡した難民の多くは、コンゴの反政府武装勢力やルワンダ軍の手で虐殺されたと言われている。

- 8) 下巻p.21。ただしこの部分には翻訳の誤りがある。「私には、こうした事項において政治的判断の余地があるとは—その必要すらあるとは—思えなかった」と訳されているが(下巻p.21)、原文では「こうした事項に関しては、政治的判断の余地が—さらにいえばその必要さえ—あるのではないかと私は考えていた」と書かれており、要するに筆者は、キベホの国内避難民キャンプでRPFが民間人を殺戮した行為に対して、非難を留保しているのである。
- 9) Pottier [2002]では、本書の立論が批判されている(pp.56-57, pp.168-169)。Pottierは、RPF政権が国際社会に醸成された同情的な空気を利用し、キベホやコンゴで犯した残虐行為を隠蔽したと論じる。そこでは、本書はRPFの情報操作に乗り、誤った見解を流布したとして指弾されている。評者はPottier[2002]の議論全体に必ずしも賛同しないが(武内[2003]参照)、キベホなどでのRPFの行為を評価するに際して、本書の立論が弱いという指摘には同意せざるを得ない。
- 10) キーワードの一つ"genocidaire"は、本来フランス語だが、これを日本語で表記するなら、「ジェノシダレ」ではなく、「ジェノシデール」であろう。またルワンダ人名で"Nyi"は「ニ」と発音し、「ニヤイラミリモ」、「ニヤイビジ」、「ニヤイラベザ」はそれぞれ「ニラミリモ」、「ニビジ」、「ニラベザ」が正しい。上巻207ページ、行末から4行目の「ザイルへのツチ族の大量脱出」は、「フツ族」の誤りである。下巻232ページ1行目の「蜘蛛」は「雲」である。

室井義雄著

『ピアフラ戦争：叢林に消えた共和国』

山川出版社、2003年、205頁、1,300円

溝辺 泰雄 (大阪外国語大学大学院言語社会研究科)

本書は、これまでナイジェリア現代経済及び経済史研究で優れた業績を残してきた著者が、ピアフラ戦争についてその歴史的背景を踏まえつつ主に政治的側面から描いたものである。長年ナイジェリアとかかわり合ってきた著者にとって、ピアフラ戦争に正面から向かい合うことは一つの大きな課題であった。しかし、その想いを抱き続けたまま20年以上の月日が過ぎてしまったのは、「対象が重すぎて、なかなか取り上げることができなかった」(本書199頁)からだという。それだけに、まさに意を決してピアフラ戦争と向き合い、それを描き切ろうとする著者の並々ならぬ決意が、本書の随所から読者に伝わってくる。

山川出版社の「ヒストリア」シリーズの第18巻として